

春しゅん 曉ぎょう

月つき 柳なぎ 燕えん 石せき

花か氣き山やま 満みきて 濃こま やかな こと霧きりに 似にたり 嬌きょう鶯おう 幾いく囀てん 知とも 知しら ず

吾わが 楼ろう 一いつ 刻こく 価あたい 千せん 金きん 春しゅん 宵しやう に 在あら ず 春しゅん 曙しよ に 在あり

【作者】日柳 燕石(一八一七〜一八六八年)(文政元年〜慶応四年)江戸後期の志士、讃岐仲多度郡(なかつたぐん)榎井(えない)村(現在香川県仲多度郡琴平町榎井)の人、本姓は草薙であるが、神器(じんき)の名を避けて父の代に日柳と改めた。幼いとき父を失い成長して琴平の三井雪航(みいせつこう)に師事し歴史に通じ詩文書画にたけていた。性豪放・俠気あり博徒 数百人の親分であつて、頼山陽に啓発されて勤皇の志を抱き、西郷、木戸等勤皇の士と交わる。戊辰の役に従い柏崎で病死した。享年五十二歳。

【語釈】*嬌 鶯…なまめかしい鶯 *幾 囀…あちこちでさえずっていること *一刻價千金…春夜起句「春宵一刻直千金」引用

【通釈】花の気は山に満ちて、いっぱい霧がたちこめているかのようである。鶯の声が美しくなまめかしく聞こえてくるが、どこで鳴いているのだろう。自分の住んでいるこの楼上からの眺めは「一刻価千金」ともいふべきであるが、それは春の宵ではなく春のあけぼのをいふのではあるまいか。